

言葉には伝統や慣習があり、また民族性も備わっています。前項と同じように「みる」という日本語で考えてみましょう。漢字で表すと、見(ケン)、視(シ)、観(カン)、看(カン)、診(シン)といろいろな用法があります。英語でもそうです。SEE、LOOK、WATCHなど、いずれも日本語に翻訳すれば「みる」という行為を表す言葉になります。つまり単に「みる」といっても、いろいろな「みかた」があることがわかります。

意志を持って積極的に「みる」という場合は「視る」になります。細かいところにまで注意して「観る」というみかたもあります。病人の世話をするのでしたら「看る」ですし、医者が診断することは「診る」になります。これらをみんな「みる」というひとつの言葉で集約しています。“かな”の「みる」ではこの区別がつかないのですが、漢字で表すと判別できます。これは英語などの外国語でも同様で、同じ「みる」にも、いろいろな「みる」があります。

エスキモーでは、積もっている「雪」と、降っている「雪」とは言葉が違います。つまり、降っている雪と積もっている雪とはまったく性質が違いますから、言葉として一緒にして「雪」という言葉で呼ぶのは、エスキモーにはかえって不便なのです。

「牛」という言葉があります。日本語では牛という言葉には雌雄の区別をしていません。ところが、英語では雄でもない雌でもない「牛」はいません。一頭いるか、それ以上いるかでも、初めから言葉が違います。牛のことをOX(オックス)といいます。OXといえば一頭です。たくさんいるときにはOXEN(オクスン)です。オクスンと聞くだけで、一頭ではないということがわかります。言葉が数まで示しているわけです。しかも、OXは雄牛に決まっています。雌牛のことをOXとはいいません。同じ雄でも去勢されていなければOXとはいわず、BULLになります。雌だったらCOWになります。牛といえば子牛を産む雌牛しか価値がないから、ほとんどはCOWでしょう。ですから牛飼いのことをCOWBOY(カウボー

イ)というのです。私たちが牛を見るときには雄も雌も関係ありません。ところが英語を話す人たちは、雄か雌かがわからなかったら言葉が喋れないし、そこに何かいるかも考えることができないのです。つまり雄か雌か、と見た瞬間に頭の中で考えるわけです。私たちは言葉によってものを考えるから、ものを見る前にまず言葉によって見ているわけです。

日本語というものは雄雌を超越しているし、数というものも問題にはしていません。ところが、そういうものを問題にしたのが欧米人なのです。彼らは昔から家畜によって生活を営んでいたもので、その当時につくられた言葉にとっては重要なことだったのです。雄でもない雌でもない「牛」という言葉は不便だったのです。初めから雌牛という言葉をつくり、雄牛という言葉をつくり、去勢すればまた呼び名を変えたのです。言葉を必要に応じて変えていったわけです。

日本語にそのような区別がなかったのは、必要がなかったからです。言葉はその民族の必要からつくられるものです。欧米人たちはその必要性に応じて言葉をつくってきました。中国人が漢字をつくる場合も同じです。

日本語で「みる」と言ったときに、いろいろな「みかた」があるのに、これを区別できたのは漢字のおかげです。漢字を使うことによって、どんな見方をしているかわかります。もし漢字がなかったら、どんな見方をしているのか判別することができなかつたでしょう。

このように、私たち日本人は、生活の中で漢字を無視しては生きられないのです。

ポイント:まず子どもの目を見てやらなければダメです。親の話を喜んで聞いているかいないか.....。喜んで聞いていないと思ったら、イヤがる前にやめることです。イルカだったら別効果があるかもしれませんが、人間はそんなことをしたらますます嫌いになります。